

43 二日後、イエスはそこを出発して、ガリラヤへ行かれた。44 イエスは自ら、「預言者は自分の故郷では敬われないものだ」とはっきり言われたことがある。45 ガリラヤにお着きになると、ガリラヤの人たちはイエスを歓迎した。彼らも祭りに行ったので、そのときエルサレムでイエスがなされたことをすべて、見ていたからである。

46 イエスは、再びガリラヤのカナに行かれた。そこは、前にイエスが水をぶどう酒に変えられた所である。さて、カファルナウムに王の役人がいて、その息子が病気であった。47 この人は、イエスがユダヤからガリラヤに来られたと聞き、イエスのもとに行き、カファルナウムまで下って来て息子をいやして下さるように頼んだ。息子が死にかかっていたからである。48 イエスは役人に、「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」と言われた。49 役人は、「主よ、子供が死なないうちに、おいでください」と言った。50 イエスは言われた。「帰ちなさい。あなたの息子は生きる。」その人は、イエスの言われた言葉を信じて帰って行った。51 ところが、下って行く途中、僕たちが迎えに来て、その子が生きていることを告げた。52 そこで、息子の病気が良くなった時刻を尋ねると、僕たちは、「きのうの午後一時に熱が下がりました」と言った。53 それは、イエスが「あなたの息子は生きる」と言われたのと同じ時刻であることを、この父親は知った。そして、彼もその家族もこそって信じた。54 これは、イエスがユダヤからガリラヤに来てなされた、二回目のしるしである。

## イエスの言葉に生かされる人生

### ① 故郷で敬われないイエス

聖書を読むと、イエスは、様々な言葉を語り、また働きをしています。そこでは、イエスがキリストであると知ることが大切です。そのことを44節の「**イエスは自ら、『預言者は自分の故郷では敬われないものだ』とはっきり言われたことがある。**」という言葉から見ることにしましょう。

これは、確かに他の福音書でも述べられています。例えば、マルコ6章4節に「**イエスは、『預言者が敬われないのは、自分の故郷、親戚や家族の間だけである』と言われた**」とあります。ここでイエスは、預言者と言われています。預言者とは、神の言葉を預かり、伝える者です。その意味で、大切な働きをしていると言えるでしょう。それなのに、イエスは故郷で敬われません。それは、周りの人々が、あれはヨセフの息子ではないかなどと、イエスのことを知っていると思い込んでいるからです。

故郷の人だけではありません。今の私たちも実は、同じです。なぜなら、私たちは社会科の教科書などで、イエスについて知っているつもりだからです。例えば、イエスは、当時の宗教指導者を批判し、人々に神の愛を説いた。そして人々が、イエスは救世主、キリストだと信じた。そのように書かれています。

ここでポイントとなるのは、人々が信じたという点です。これは言い換えると、人々が勝手にキリストだと思い込んだのであるということです。しかしこれでは、イエスという特定の存在が救世主、キリストであるとは言えません。なぜなら人々が信じるなら、イエス以外にも、様々なキリストがいることになるからです。テレビ番組のセリフではありませんが、信じるか信じないかはあなた次第です、と言ったところでしょうか。しかし問題は、信じる自分、私たちではなく、信じる相手です。信じるに値しないものは、いくら信じていても無意味です。

聖書は、そのようなテレビのバラエティー番組で言われている程度のことが書かれているのでしょうか。むしろ私たちが信じるかどうかではなく、語っているイエス自身の言葉に注目しましょう。

### ② イエスの言葉を聞く

そこで次に、イエスの言葉に生かされるためには、イエスの言葉に聞くことが求められています。そのことを50節の「**イエスは言われた、『帰ちなさい。あなたの息子は生きる』**」という言葉から見ることにしましょう。